

東日本大震災を経て重視された絆に関する一考察

——社会の価値観の変遷に注目して——

Considering the Types of Kizuna Deemed Important Since the Great East Japan Earthquake of 2011
—Paying Attention to Changes in the Social Sense of Values—

住居学科 阿部 一咲子 平田 京子
Dept. of Housing and Architecture Isako Abe Kyoko Hirata

抄 録 2011年の東日本大震災発災後、「絆」という言葉に注目が集まり、重要視されるようになった。しかしながらその絆とは具体的にどのようなものかについては、未だ明らかにされている部分が少ない。そこで人々が強く求めた絆の類型とその質を明らかにすることを目的とする。社会の価値観の変化と実際に人々の間に築かれている絆の類型を把握することにより、人々が失い、社会の中に取り戻そうとした絆の類型と質とを考察する。

キーワード：東日本大震災，絆，つながり，社会，価値観，変遷

Abstract Since the Great East Japan Earthquake of 2011, the concept of bonds (kizuna) between people has drawn greater attention. What kizuna refers to has not been elucidated; however, it is clear that only a few things can be considered the essence of kizuna. We conducted an examination to elucidate the types and qualities people seek in regard to kizuna. By understanding the types of kizuna both in regard to changes in the social sense of values and in regard to how people have established kizuna among themselves, we determined which of these types and qualities people have lost and sought to regain in society.

Keywords: Great East Japan Earthquake, kizuna, personal relations, society, sense of values, changes

1. はじめに

現代社会は、自己の利益追求に価値をおく市場経済社会である¹⁾。しかし東日本大震災後は「絆」という言葉に注目が集まり、重要視されるようになった。そこには市場経済社会では切り捨てられていた、「包摂的な社会創造」の価値の再発見と再評価があった²⁾とされる。

そこで本研究では人と人とのつながりである絆に着目し、社会の価値観の変化と実際に人々の間に築かれている絆の類型の考察により、人々が失い、社会に取り戻そうとした絆とはどのようなものかを明らかにする。

絆、つまり人と人とのつながりはソーシャルキャピタルの研究と共に議論がなされている。ソーシャ

ルキャピタルは社会関係資本と呼ばれ、「社会的信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク（社会的なつながり）」といった社会組織の特徴を指す³⁾。家族、仲間、地域、職場などの社会グループで形成され共有される相互関係のことである³⁾。本研究では絆を、社会的なつながりを指すネットワークであるとする。その上で絆を「社会的信頼」「互酬性の規範」と並び、人々の間の協調的な行動を促す社会関係資本のうちのひとつであるとした⁴⁾。

2. 研究の流れ

研究の流れを図1に示す。

現在までの社会背景をとらえた上で、人々が求め、社会に取り戻そうとした絆の類型を明らかにする。まずは文献調査1において、有識者として心理学者、

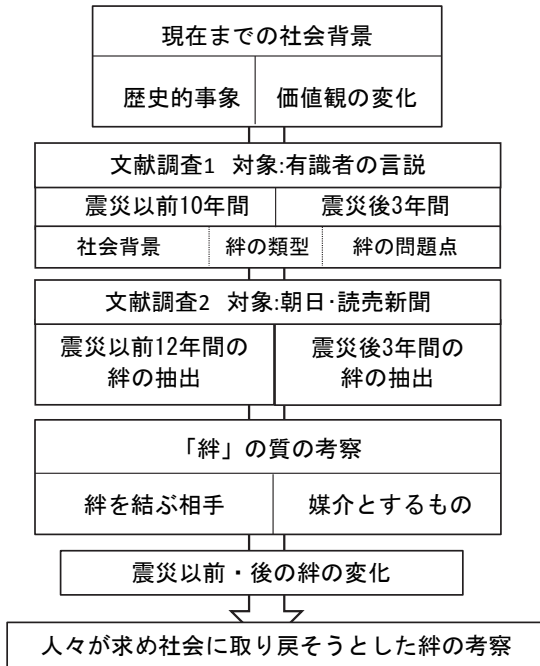


図1 研究の流れ

社会学者等の専門家の著作物の中から本調査のテーマに該当する言説を抽出した。これらの有識者の言説より、絆の類型と問題点を明らかにする。震災以前10年から震災後3年までの13年間に出版された書籍・論文・エッセイを対象とした。そして文献調査2として、全国紙5紙のうち、朝日新聞・読売新聞の2紙を選び、全文データベースで「絆」、「しがらみ」、「つながり」のキーワードで検索し、抽出した記事の中から震災以前12年・震災後3年の間に該当するものを選出した。そして具体的な絆の質を考察するため抽出したデータを、絆を結ぶ相手、媒介とするもの、に分類した。媒介に関してはさらに「金銭に換算できる価値」、「金銭で換算できない価値」で分類し具体的な絆の質をみていく。以上の2種類の文献調査により絆とは何かを明らかにし、さらに震災以前・後それぞれの絆の質について比較した。

3. 現在までの社会の変化と価値観の変遷

高度経済成長を迎える以前の日本社会は場の共有を前提とし、特定の集団・組織で形成する地域コミュニティで伝統的な共同体を築いていた。この伝統的な共同体は農村型コミュニティと呼ばれること

もあり、凝縮度の強い情緒的つながりを築いていたが、同時に余所の人間に対して排他的・閉鎖的であるという欠点も持ち合わせていた⁵⁾。この頃の日本社会は個人と個人を結び付けるつながりや、それらで結ばれた集合体である集団を重視し、それにより生まれる縁や信頼関係といった情緒的な価値を重んじていた¹⁾。それは効率や利益を度外視したものであり、経済の発展とは両立できるものではなかった¹⁾。そのため、高度経済成長を迎えエネルギー革命により効率的な思考が主流になる一方で、情緒的な要素が軽視されるようになる。経済的な利益や、効率といった要素が重視されたのである。また核家族化も進み多くの人と繋がっていた家族の在り方から、狭いつながりの中で暮らす閉鎖的で孤立した家族の在り方へと変化した。それは農村も同様であり国家による農村改造により道路が整備されたことで都市と繋がり、自動車社会も迎えたことで村は近代化を迎えた。個人あるいは家族として自己完結する生活が一般的になり、その点では伝統的な共同体は終焉した⁶⁾。そんな風潮の中で人々は共同体に縛られることなく、人間関係が希薄であるがゆえの「気楽さ」を享受し、自由を得た。しかし結果として核家族化は進み、他者との競争の中で自己のみの利益の極大化を目指す、個人化されたライフスタイルで暮らすようになり、つながりは薄れ、人々は社会の中で孤立するようになった。このように高度経済成長により新たな価値観を得た社会は、経済的な価値を重視し、経済発展を最大の目的としてきた。

しかし関係性の希薄さから社会的に孤立する人が増加する中、物質的な豊かさが自分自身を豊かにするとは考えない層が台頭してきた⁷⁾。今まで切り捨てられてきた価値を再評価する動きが生まれ、2010年1月31日にNHKスペシャル「無縁社会～“無縁死”3万2千人の衝撃～」が放送されるなど、人と人との関係性が希薄である現代社会を無縁社会と名付け、問題視する動きが高まりを見せた。そして社会は作り替えを必要とする時代へ突入する。⁸⁾

そんな中、2011年の東日本大震災の発生により人々は孤立した社会の中で、災害時などの不測の事態における生命の危機を感じ、共助関係の希薄さを切実な問題として受け止めた。国民は今回の東日本大震災によって個人の利益を追求する近代的な社会に対し、問題意識を強め、早急に対処すべきだと、不安を掻き立てられた。また、それは問題意識を

もった人々が実際に行動するきっかけとなった。それによって現在までの社会の在り方を問題視するように東日本大震災以降、絆という言葉象徴として、今までの豊かさや絆の在り方が問い直され、人と人とのつながりの重要性が再認識され、謳われた。

4. 天秤図による価値観の描出

社会の価値観の変遷をとらえる中で、人々の価値観には3つの軸が存在していた。そこで仮説として図2のように天秤で価値観の変化を概念的に表してみる。

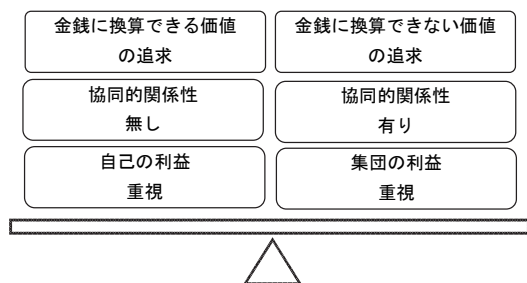


図2 価値観の天秤

本図では、左右のおもりがそれぞれ相反する関係を有するものとしている。1つは金銭に換算できない価値の追求であり、関係性の豊かさなどを求める。これに相反するものとして金銭に換算できる価値の追求が挙げられ、物質的な豊かさを求める。2つ目は協同的関係性が存在することであり、人間関係において協力しあう関係性を築く。相反するものとして協同的関係性が存在しないことが挙げられ、協力しあう関係性をもたず、支え合いを必要としない。3つ目は集団の利益の重視であり、共同体を重んじる。相反するものとして自己の利益の重視が挙げられ、共同体に縛られず、個人至上主義を掲げているものである。このように互いに相反性をもつ天秤が、人々の価値観の変化により揺れ動くと考えた。「金銭に換算できる価値」を追求すると左に傾き、「金銭に換算できない価値」を追求すると右側に傾くと仮定している。天秤の傾きは、新聞記事を対象とし具体的な絆の質を調査する文献調査2の結果を用いて、新聞記事の文脈からそれぞれのおもりが重要視されているか、否かを読み取り、全体の重さとして捉え描き出すこととする。ここでは「重要視されているか否か」のみを読み取り、それらの程度は描き

出さず、それぞれのおもりが全て同じ大きさであると仮定した。

5. 有識者の言説に基づく絆の変化に関する記述

文献調査1では、まず有識者として心理学者、社会学者等の専門家を設定し、それら専門家の著作物の中から本調査のテーマに該当する言説を抽出した。これらの有識者の言説より、絆の類型と問題点を明らかにする。

震災以前10年から後3年までの13年間に出版された中から「絆」、「つながり」、「東日本大震災」に関係する書籍を選出した。論文については論文データベース CiNii で「絆」、「つながり」、「東日本大震災」のキーワードで全文検索した。「絆」では3068件、「つながり」、「東日本大震災」では934件が抽出され、その中から震災以前10年から後3年の13年間に発行されており、論題に関連しているものを選出し、エッセイも同様に選出した。結果、書籍4冊、論文3編、エッセイ1編を対象とした。

まず絆に関連する記述を抽出し、表1の3つの項目で分類し、分類1とした。

表1 震災以前・震災後の絆の類型

分類1	分類2
社会背景	
絆の類型	設定している絆の名称 絆の種類
絆に対する問題提起	密な「つながり」によって生まれる「しがらみ」
	密な「つながり」のもつ排除性
	「絆」と現代の価値観との整合性の無さ
	「絆」を待望することに対する疑問

次に分類2では、分類1の震災以前・後の「絆の類型」に着目し、「筆者が設定している絆の名称」、「絆の種類」に分類した。

その結果、絆の類型として、震災以前は生まれた家、生まれた土地の縁によって結ばれる「生まれの絆」である地縁と血縁、そして都市において、学校や会社で社縁を築いていた。これらを主たる絆としつつ、「ふだんは疎遠だが、いざというときにはちょっと連絡してみる」、「何かあったとき、いざというときだけ機能する」といった「ゆるやかな絆」、「ささやかな絆」、「都合のよい絆」を築き、絆を結ぶ相手を増やし、ひとつの関係性に掛かる負荷を軽減すること⁹⁾を推奨していた。震災後はさらにその動きが高まり、趣味や社会活動を通して協同的関

係性を作り上げ、同好という価値を共有する仲間縁という新しい絆が台頭してきた。このように震災以前は結びつきの強い堅固な絆を作ろうとする動きがみられたが、震災後は個人主義の風潮に合致した、ゆるやかなむすびつきをもつ自由自在に変質可能な絆をつくろうという動きがみられた。

また、分類1の震災以前・後の「絆に対する問題提起」に着目し、これを表1の4つの項目に分類した。絆の問題点として、震災以前に人々は交差構造の社会で多様な価値観をもっており¹⁰⁾、自由を捨て、単一の価値観での団結は困難だという点が存在する。また絆自体も、親密になるほど排除性を生むという問題をはらんでいる。震災後は絆への期待が高まる中、無い絆を求めるあまり絆によって苦しめられる、「絆ストレス」を感じる新しいしがらみ⁹⁾が生まれた。このように豊かさや絆の在り方が見直される中で、現代の価値観に合致した新しい絆が求められていると考えられる。

6. 絆の質とその変化

絆の質をみていく上で、人々が築いている絆の具体的なデータを補うため、文献調査2を行った。

全国紙5紙のうち、朝日新聞・読売新聞の2紙を選び、全文データベースで「絆」、「しがらみ」、「つながり」のキーワードで検索し、抽出した記事の中から震災以前12年・震災後3年の間に該当するものを選出した。朝日新聞554件、読売新聞274件を対象とする。そして具体的な絆の質を考察するため、抽出したデータを絆を結ぶ相手、媒介とするものに分類した。媒介に関してはさらに「金銭に換算できる価値」、「金銭で換算できない価値」で分類を行った。

まず震災以前において、金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述を考察する。絆を築く相手に対し詳細な記述がなく、「人」と大枠で括られているものを人間関係という枠組みとし、表2のように表した。

人と人とを結びつける媒介として、かつての村社会にいたおせっかいな存在の必要性を主張する意見がみられる。密な関係性を疎ましく思い孤立したことにより失ってしまったものを、再度取り戻そうとする動きがあった。経済社会の中で人々は人間関係を断つことで煩わしさから脱し、互いの衝突や軋轢を避けてきた。

表2 人間関係において金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述（朝日新聞 一部抜粋）

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
(声) 若い世代生まれ向き合う中で	2008年8月31日	近年、社会では人間関係の希薄化が問題となっている。私はこの問題の原因は他人への興味のなさではなく、他人とかわかることで自他共に傷つくの恐れることにあるのだと考える。	一人一人	傷つくことを恐れる
		現代社会では優しさの意味を覆き違えている人が私を含め多いと思う。積極的に正直に他人と向き合うことで、本当の人間関係が築けるのではないだろうか。		正直に他人に向き合う
		衝突しながらその人のことを理解し、そうして信頼や絆(きずな)は生まれるのだと思う。人の考えを理解できるというのは、とても幸せなことだ。		理解 信頼

しかしそれらは絆を築くための相互理解の態度からは最も遠いものである。それに気づいた人々が、絆とは何かを再度考え直す態度がみられた（朝日新聞2008年8月31日）。

次に地域に根ざした活動や地域住民同士の関わり合いなどを通し、絆を築いているものを地域での関係という枠組みに置き換えた。その中で、表3のように地域住民間にまとまりがないことに対する不安や、疎ましいと感じていた人間関係を求める意見がみられた。

表3 地域での関係において金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述（読売新聞 一部抜粋）

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
東京・三宅島住民、長引く避難生活の将来に不安(解説) 地域のきずな薄れ、	2000年11月23日	全島避難から三か月近くなった伊豆諸島・三宅島(東京都三宅村)の住民の間で、以前のようなまとまりのある島の暮らしには戻れないのではないか、という不安が広がり始めている。	地域住民 一人一人	仲間意識 三宅島島民ふれあい集會 住民が一堂に会することができる装置づくり
		三宅島の避難生活は、体育館などの集団生活を行わず、空き公営住宅などで暮らす前例のない方式を取っている。避難生活の質は確保される一方、地域社会のまとまりは薄れざるをえない。		
		こうした中、「村の仲間意識を持ち続けよう」と避難先ごとに島民連絡会を組織する動きが出てきた。来月三日には避難後初めて全住民に呼びかける「三宅島島民ふれあい集會」を開く計画もある。島のきずなを確かめ合う場になると期待されている。		

人々の声に同調するように、昔ながらの密接な人間関係が現存している地域を取り上げ、絆の重要性

を主張し絆が薄れている社会に対し警鐘を鳴らしていた。

地域住民同士の絆を築く媒介として、最も多くみられたのは地域行事・イベントである。住民が一堂に会し知り合う機会を作り、コミュニケーションを介して絆を築く。同じ地域に居住するという共通点から行事の執り行いや、防犯、災害時の対応などの多くの問題を共有する。これらを話し合い、対応策として行事への参加や子どもや高齢者の見守り、防災組織を作るなど災害時に助け合う関係を築く。地域活動の中で連帯感・一体感が生まれ、共助関係が築かれる（朝日新聞2003年1月17日）。

そのほかにも地域サロンでの活動を通じて多世代間に交流をもたらす試みも多くの地域でなされていた。誰もが集まることができる場であり、高齢者と子供などの若い世代が一堂に会し、交流を楽しむ。高齢者は若い世代と交流することで活力を貰い孤独感が薄れ、子どもたちは高齢者とのふれあいから他者を思いやる気持ちを学び、知識を吸収する。地域活動に積極的に関わることが難しい層も地域社会に組み込み、関係性を築き上げていた（朝日新聞2003年1月9日）。このように経済社会の中で切り捨てられてきた、地域住民同士の密な関係性を再評価する動きがみられた。出会いが広がる仕組みを作り、参加することにより親交を深め日常的に挨拶を交わし合う顔見知りの関係性になり、絆を築く。ここで求められている絆は、かつて地方で存在した関係性の密接さに近似する。

次に家族の構成員同士のふれあいを通して絆を築いているものを家族関係という枠組みに置き換えた。核家族化が進み無縁社会が問題視される中で、表4のように、昔ながらの多世代同居を維持している人々を取り上げ、血縁の重要性を訴えかける動きがみられた。

表4のように多世代同居では大人数で食卓を囲むなど昔ながらの一家団欒の時間が残されており、核家族化で失われつつある家族の時間が現存している。また構成員が多く全員が自分のできる仕事を探し、それぞれが自分の役割を果たし助け合い、生活を送っている。このように大家族のつながりは互いに助け合い協力すべき場面では結びつきを強め、個人を尊重すべき場面では弱めるなど、変質させることでうまくいっていた。

また朝日新聞2009年12月27日の記事に、朝日

表4 家族関係において金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述（読売新聞 一部抜粋）

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
ぬくもり「絆を結ぶ」(1) 4世代助け合い、共同生活の「大家族」の島根	2002年1月1日	平田市国富町に住む四世代八人家族、桑原孝栄さん(66)一家の夕飯はいつもにぎやかだ。切り盛りするのは陸也君らの母朋子さん(39)。「両親との同居さえ大変と言われる時代なのに、『四世代なんて信じられない』とよく言われます。でも意外と居心地いいですよと笑う。	人一家族	四世代同居
		家族全員が自分の出来る仕事を探し、それぞれが担当する生活。朋子さんは「みんなが触れ合っているんだと感じますね。大家族のつながりって、がちりしたものでなくて、お互いに助け合って何となくうまくいく共同体のようなものみたい」と言う。		お互いに助け合って何となくうまくいく共同体のようなもの
「世代のきずな」(4)「清水屋旅館」(4)「4世代で切り盛り」山形	2009年1月9日	清水屋旅館は、1973年に信秋さんの父・千春さん(87)と母・うめよさん(81)が創業。現在は、信秋さんの妻・敬子さん(55)と長女・志津さん(31)、志津さんの夫・和久さん(31)、孫の真仲ちゃん、朝日ちゃん、志保ちゃん(1)の計4世代9人が生活する。	人一家族	四世代同居
		食事の準備に後かたづけ、洗濯、部屋掃除、風呂洗い……。一家総出の日常業務では、自然と「以心伝心」の協力が育まれるという。信秋さんは、「大変そうだな」と先回りして手伝うこともあれば、『あれ、もうやってくれたんだ』と感謝することもある。言葉はなくてもね」と説明する。		協力
		家庭的で温かい旅館の雰囲気ひかれ、毎年のように宿泊する常連客も多い。「家族一緒に、お客様に愛される旅館を続けていくのが一番の夢かな」(信秋さん)。これから4世代で助け合い、「きずな」を育てていくつもりだ。		助け合い

新聞社定期意識調査の結果が掲載されていた。5択の選択肢の内から選ぶ、家族を結びつけているものという問いに「精神的なもの」という回答が33%、「一緒に暮らすこと」が30%、「血のつながり」が29%と上位に並んだ。「経済的なもの」などの回答を選ぶ人はほとんどおらず、「精神的なもの」と答えた人は若い世代ほど多く、20代で48%、70歳以上では17%という結果が得られた。世論としてはまだ信頼や血縁という精神的な要素や血のつながりを家族の絆とする意見がみられた。

しかし「一緒に暮らすこと」がおおよそ3割を占めていることから、今後は互いに支え合い助け合うという共助の側面が強調されていくと考えられる。

次に、震災後の金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述を考察する。人間関係においては表5によれば、「生きづらさを解消し、生活圏の快適性を高めるために最も重要だと私が考えるのは、アダム・スミスが唱えた『共感』」であるとしている。「スミスは『道徳感情論』(1759)において、共感、すなわち他人の感情を自分の心に写し取り、同じ感情を引き起こそうとする能力が社会の秩序と繁栄を形成すると説いた。」という一節の通り、想

表5 人間関係において金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述 (読売新聞 一部抜粋)

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
「論点スペシャル」経済成長を考え直す	2011年10月3日	量的な成長は停滞し、デフレが続く、失業率が増加している。金銭に換算できるものは奪い合いになり、不運な人や弱者にしわ寄せが来ているのが現状だ。その中で、生きづらさを解消し、生活圏の快適性を高めるために最も重要だと私が考えるのは、アダム・スミスが唱えた「共感」だ。	一人一人	共感
		スミスは『道徳感情論』(1759)において、共感、すなわち他人の感情を自分の心に写し取り、同じ感情を引き起こそうとする能力が社会の秩序と繁栄を形成すると説いた。		同じ感情を引き起こそうとする能力
		豊かな想像力で他人の苦しみや悲しみ、喜びを感じ取り、利己心を制御し、物事の善悪を判断する。その過程で人とのつながりが育まれ、果たすべき仕事や努力目標が見いだされる。努力の成果が他人から正当に評価されれば、さらに力が湧くだろう。個人の能力が人生を通じて最大限に発揮できるような社会になれば、よりよい生活圏へと変わるはずだ。		豊かな想像力
		共感力はかつて日本社会の強みであり、高い技術開発力と相まって、高度成長と地域振興を推し進めた。ところが、生活水準が上がった一方で低成長の時代となり、共感する力が弱まっていると感じる。単身社会や孤独死など深刻な社会問題の要因の一つは、共感力の低下にあるのではないかと。低成長を乗り切り、生活圏の質を上げられるか否かは、共感によって支えられる社会をいかに回復するかにかかっている。	個人が能力が人生を通じて最大限に発揮できるような社会	共感力

像力を豊かにして他人の苦しみや悲しみ、喜びを感じ取り共感することで人とのつながりが生まれる。かつての日本社会にはこの「共感力」が存在していたが、近年の日本社会ではこの力が弱まっていると考えられている。

この「共感力」の低下を要因の一つとして、孤独死や単身社会などの問題が顕在化しているのだと考えられる。すなわち、「共感力」を取り戻すことが現代社会を生き抜くために必要になる。

次に表6、表7に地域での関係に関する記述をみる。これらの表に表わされるように地域住民同士のつながりにおいて伝統的な絆である地縁を再評価し、昔ながらの祭りや伝統行事の重要性を見直すことで地方の伝統を取り上げ、あるべき姿として評価する動きが高まった。また、新たにイベントを企画して地域を活性化させようという動きもあり、薄れていた地域住民同士の絆を再び結び直そうという動きがみられた。この動きは東日本大震災以前にもみられており、災害や無縁社会化が問題視される中でその動きが全国に広がっていく様子が見てとれる。

しかし、互いに干渉し過ぎることで生まれるしが

表6 地域での関係において金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述 (読売新聞 一部抜粋)

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
「生活に課べ住民」ラジオ体操の自主活動生む地域の	2012年10月9日	夏休みや、企業の始業時に行うという印象が強い「ラジオ体操」が今、見直されている。健康だけでなく、地域のつながり作りにも一役買っているという。	地域住民 — 地域住民	ラジオ体操
		同市保健センターの石川春美さんは「ラジオ体操会が地域活動の土台となり、住民のつながりや自主的な活動が生まれた。うれしい副産物です」と話す。小学生の登校時間帯となる8時台に、見守りを兼ねて体操をしたり、会の有志が夕方にバトロールしたりする団体もあるという。	地域住民 — 地域住民	地域活動 自主的な活動

表7 地域での関係において金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述 (朝日新聞 一部抜粋)

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
(とちぎ学生生年)自治会と育成会で絆 / 栃木県	2012年11月21日	自治会は、住民にとって、最も身近なコミュニティだ。また、育成会は地域の子供の育成を目的として活動している。地域住民にとって大切なこの二つの会の活動は、最近、盛んなのか。宇都宮市のみんなの町づくり課と、子ども未来課に行き話を聞いてきた。	地域住民 — 地域住民	自治会
		自治会は防犯の強化にも重要な役割を果たしている。お祭りや行事などの自治会活動で、近所同士が顔を合わせて顔見知りになれば、もし不審な人がその地区に入ってきたら、見たこともない怪しい人だと見分けがつく。また、市の担当者によると、危険な夜道を照らしてくれる町の街灯は自治会のお金によって動いている。ごみステーションなどの管理をやっていたり、町のバトロールをしたり、地域の人々を見守ってくれていた。このように、自分たちで自分たちの町を安全にする——それが自治会の大切な役割のひとつだといえる。		自治会活動 顔見知り 見守り
				自治会
		育成会		

らみを避けていた人々が、いきなり地縁を取り戻すことは困難である。特に、より個人化されたライフスタイルを送る都市の住民にとっては困難を極める。そこで地縁の重要性を再確認しつつ、無理のない顔見知り程度の関係性を築こうとする方針が多く活動の中にみられた。

表6のような声掛け運動やラジオ体操の実施や、地域に誰でも集うことのできる憩いの場などを設けることにより、日ごろから地域住民同士が関わり合いをもてるような機会をつくるのが重要である。またそうした普段の何気ない行動に、ひとつお互いに見守る視点を加えることによって、自然と地域住民同士で交流しコミュニケーションを取りながらも、助け合い、支え合う関係性を作り出していた。また、東日本大震災が発生したことから防災に対する意識も高まっており、表7にもみられるように防災を目的とし、地域住民が自治会や町内会に参加することにより地域住民同士の絆を結び直そうという動きも

みられた。これは目的が明確であり、地域に参加することで自身の安全もある程度保障されることから利点が明白である。よって絆を求めて行動を起こすより比較的敷居が低くなっており、防災の副産物として地域住民同士の絆を手に入れるといった意見も多くみられた。

表8に家族関係に関する記述を抜粋して示す。東日本大震災によって命の危険を実感した人々は、何気ない普段の日常の尊さを改めて感じ、もっとも身近な関係である家族関係を見直した。心の拠り所としての家族の存在を再評価するようになったのである。家族で助け合い、支え合う態度が述べられた記事が多く掲載されたほか、血縁を重視するような意見が多くみられた（読売新聞 2011年6月11日）。その一方で、表8において「家族の絆が見直されているとはいっても、頼りになるのは血縁だけ、一緒に暮らしてこそ家族、という考えには限界がある。今後は多様な家族のあり方を模索する人が増えるのではないか。」という指摘が、家族社会学者 岩上真珠氏によってなされるなど、かつての血縁のイメージに縛られることは危険だと警鐘を鳴らす意見もみられた。

表8 家族関係において金銭に換算できない価値で築かれる絆に関する記述（読売新聞 一部抜粋）

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
権（2）日本あれから（連載）「絆」を求めて	震災後、ろって写真	家族のつながりは、幸福度の指標で最も重視される項目の一つだ。「家族の絆が見直されているとはいっても、頼りになるのは血縁だけ、一緒に暮らしてこそ家族、という考えには限界がある。今後は多様な家族のあり方を模索する人が増えるのではないか」。聖心女子大の岩上真珠（まみ）教授（家族社会学）は指摘している。	人—家族	多様な家族のあり方

次に金銭に換算できる価値で築かれる絆に関する記述を考察する。表9にサービスと人の関係で金銭に換算できる価値で築かれる絆に関する記述を抜粋した。

核家族化が進み、周囲に頼る相手がいない無縁社会となったことにより、金銭を支払うサービスによって共助の穴を埋めようとする動きがみられた。それは特に高齢者や子ども、子育て中の母親など社会的弱者にみられる。表9に、共働きの増加や核家族化、地域社会の崩壊で母親たちは孤立して子育てをしなければならない、「孤育て」に直面しているという記述がみられる。昔なら身内に任せていた労

表9 サービスと人の関係で金銭に換算できる価値で築かれる絆に関する記述（朝日新聞 一部抜粋）

題名	年月	絆に対する記述	絆を結ぶ対象者	媒介
（孤族の国 第2部 家族代行：3） 子の送迎、救う手		大阪市東淀川区。2人は放課後をNPO法人「ほっかほか」の部屋で過ごした。	親—業者 子供—業者	送り迎え 育児サークル（サービス）
		育てを支える「ほっかほか」ができたのは6年前。保育園や習い事教室へ、親に代わって子どもを送り迎える。他にも小学生を放課後に預かったり、育児サークルを開いたり。拠点はマンション1階に設けた「ハウス」。送迎の利用料は30分500円だ。		
（孤族の国 第2部 家族代行：3） タクシ業界は商機 2011年1月26日		15年前に助産院を開業、母親たちに接するうち、地域から孤立した「孤育て」に悩む姿を目の当たりにした。	母親—業者	送り迎え（サービス）
		高松市のNPO法人「わははネット」が2004年に地元タクシー会社に依頼し、運転手5人から始まったサービス。全国子育てタクシー協会も設立され、今では97社が加盟、約1100人の運転手が登録している。		
		わははネット理事長の中橋恵美子さん（42）は、「共働きの増加や核家族化、地域社会の崩壊で母親たちは『孤育て』に直面している。子育てタクシーがこれだけ広がったのは必要とされる状況があるから。ぜいたく品ではなく必需品です」。		
（孤族の国 第3部 子の送迎、救う手		ほっかほかにとって意外なことがあった。活動を支える保育サポーターに約100人もの人が名乗りを上げてくれたのだ。活動で受け取る謝礼は内容や時間帯で異なるが、送迎なら30分350円。お金のためではない。「何か役に立ちたい」「外とつながりたい」といった主婦や学生がほとんどだ。	主婦—会社 学生—会社	仕事
		車にとえるなら、ハンドルの遊びがない状態が今の子育て世代共通の苦しみではないか。仕事、育児、家事と綱渡り。私も、一歩間違うとどこへ落ちるのだろうかと不安になる。NPOを媒介として、新しい「持ちつ持たれつ」の関係を地域に築いていけないか。	母親—業者 子供—業者	ビジネス（サービス）

力が、今は金銭と引き換えに他者から入手しなければならぬのである。そんな中で子どもの送り迎えサービスなどは重要性を増し、ビジネスの絆は共助の関係性を築くことが困難な場合の代理の絆として機能する。

次に、震災後の金銭に換算できる価値で築かれる絆に関する記述を考察する。表10にサービスと人の関係で金銭に換算できる価値で築かれる絆に関する記述を表した。

震災後は、金銭に換算できる価値のみでつながる関係性を重視する風潮はほぼ消滅した。それに代わって問題視されるようになったのが、インターネットを介したつながりである。インターネット自

表 10 サービスと人の関係で金銭に換算できる価値で築かれる絆に関する記述 (朝日新聞 一部抜粋)

題名	年月	絆に対する記述	絆を軸とする対象者	媒介
(談)つながりすぎ社会を生きる影 千葉雅也×批評家・浅田彰 哲学者・	2013年12月11日	「接続過剰」とは、どういう意味ですか。 千葉 今のネット社会では、さいなことまでソーシャルネットワーク(SNS)などで共有され可視化されている。コミュニケーションの形骸化も進む。常に「つながりのアピール」が求められ、メッセージが来ればできるだけ早く返信することが「思いやり」として目的化する。SNSとスマホの普及は、視聴覚を総動員し、依存症のような状態を広げている。僕が考えているのは、個であるための「切断」の哲学。浅田さんが1980年代に主張した「逃走」論をふまえたものだ。今は、「逃走」の行方だった横へのつながりが、過剰化している。	一人一人	SNS
				コミュニケーションの形骸化
				早く返信する「思いやり」
				横のつながりの過剰化

体が金銭の支払いによって得られるサービスであるため、ここではネット上のつながりは金銭に換算できる価値に分類した。

インターネットを介したつながりでも、その利点をうまく活かし離れた土地にいる家族・友人との関係性を持続させるなど、絆を生み出す使い方も存在する。問題になっているのは、表 10 の通り常に誰とでもつながっていることによるしがらみや、常につながっていることに依存するという現象である。

SNS などでは、コミュニケーションの形骸化が問題視されている。顔の見えないコミュニケーションでは、コミュニケーションが生み出す思いやりや助け合い、支え合いが名ばかりのものになっているのである(読売新聞 2013 年 1 月 7 日)。そんなインターネット上でのみの交流が協同の関係性や集団の利益を生み出すとは断言できない。しがらみを嫌い、

対面での人とのつながりを断った人々は、気軽にボタンひとつでつながることのできるインターネットでの関係性を得た。その気軽さから臨機応変につながったり、つながらなかったりと自身が関係性を選ぶことが可能に思える。しかし、実際は目に見えない関係性である分、人々は常につながることによって関係性の確かさや安心感を求める傾向がある。このような特徴をもつインターネットを介しての絆は、使い方によっては絆のマイナス面であるしがらみへと変質するため、臨機応変に使い分ける付き合い方が求められる。

7. 東日本大震災前後の絆の比較

このような震災以前の絆と震災後の絆を表にまとめて表すと、表 11 のようになる。表頭を、「金銭に換算できる価値」、「金銭に換算できない価値」、「双方の要素を併せもつ価値」とし、表側を、絆を結ぶ関係性とした。そして絆を結ぶ媒介を表すこととする。存在しない場合は斜線で表した。絆を結ぶ媒介については、条件に合致するデータにおいて、複数回挙げられている代表的なものを選んだ。また、その中でどの関係性においてもみられた媒介物を着色して表す。

表 11 に表される通り、震災前、後を通して金銭に換算できない価値では、支え合いや助け合いを媒介として絆を築いていた。「思いやり」などの情緒的なキーワードが多くみられ、かつてのムラ社会で根付いていた、損得の関係なしに繋がり合う人間同士の絆を想起させる。

表 11 東日本大震災以前・後の絆

	東日本大震災以前			東日本大震災後			
	金銭に換算できる価値	金銭に換算できない価値	双方の要素を併せもつ価値	金銭に換算できる価値	金銭に換算できない価値	双方の要素を併せもつ価値	
人間関係	サービス	家族代行業	助け合い	インターネット	助け合い	シェア	
		送り迎えサービス	支え合い		サービス	支え合い	感動消費
		見守りビジネス	コミュニケーション(交流)		形骸化したコミュニケーション	思いやり	知らない人とのつながり
地域での関係		イベント	地域通貨		支え合い	コミュニティカフェ(交流拠点施設)	
		助け合い	サービス	助け合い			
		挨拶	サロン	イベント	対面販売		
家族関係		コミュニケーション(交流)			助け合い	多世代同居	
		協働			支え合い	絆消費	
		支え合い			震災体験	ゲームなどによるコミュニケーション	
高齢者との関係		支え合い	共生		コミュニケーション(交流)	サロン(交流拠点施設)	
		助け合い	共生型住宅		独りじゃないという実感	新しい公共	
		ボランティア	助け合いながら自立する		助け合い		
仲間関係		イベント	インターネット		支え合い		
		共感	趣味		助け合い		
		助け合い	カフェ		共感		

注：すべての関係性でみられた媒介物を着色して示す。

金銭に換算できる価値では、支え合いや助け合いを求めず金銭を支払い、サービスを受けることで人間関係の隙間を埋めていた。双方の要素を併せもつ価値では、対象者同士が共に暮らすことや、交流拠点施設に赴くことで絆を築いていた。「助け合いながら自立する」というキーワードが挙げられていた通り、繋がり合う関係性の中にも、互いにもたれ合うのではなく、個人を尊重ししがらみに変質しにくい臨機応変な絆を築こうとしていた。

結果、絆を結ぶ媒介に注目しても、震災前後で違いはみられなかった。しかし、金銭に換算できる価値、金銭に換算できない価値、双方の要素を併せもつ価値それぞれで築かれる絆の違いが明らかになった。この結果を踏まえ、大きな枠組みで絆を捉えるために絆の質を考察する。

上述の調査から、絆の質を表す3種類の絆の類型が存在することが判明した。1つ目は天秤図に示される、金銭に換算できない価値で築かれる伝統的な絆である。

伝統的な絆とは「生まれた家、生まれた土地の縁によって結ばれる『生まれの絆』¹⁰⁾であり、単一の価値観のもとに団結する絆である。ここでの伝統的な絆とは、上記の考えを基にしてかつての伝統的な絆を再評価し取り戻そうと、単一の価値観のもとに思いやり、助け合い、支え合いなどの金銭に換算できない価値のみを介してつながる関係性のことを表す。

まず人々は災害など不測の事態に備えて、互いに支え合い、助け合う共助関係や信頼関係を求める。そこで関係性を得るため人々は互いに同じ問題を抱える者同士として、顔見知りになるための機会を設ける。このように絆を築くためには、まず互いが接触しなければならない。しかし現代社会では何の仕掛けもなしに人々が関わり合うことは困難である。そこで、人々が気軽に関わり合う仕組みや、共通の目的、趣味を介した機会を設けることにより、絆を築く準備段階とするのである。それが地域住民同士の関係であれば地域行事やイベント、ふれあいサロン、夫婦関係であれば子育て経験の共有などが該当する。そこで同じく支え合う関係性を求めている人と出会い、絆を求めている者同士としてふれあい、関わり合う中で双方の間に共感が生まれる。共感はいを理解しあう際に最も重要な態度である。想像力を豊かにして他人の苦しみや悲しみ、喜びを感じ

取り共感することで人とのつながりが生まれる。そうして当初は地域活動や趣味などを介した、限定された間柄で共助関係や信頼関係を築くことを目的として生まれたつながりが、日常的に顔を合わせ交流する親密な関係性へと変化する。そして地域活動や趣味など、当初媒介としていたものを介さなくとも交流を重ねて信頼関係を築くことができた時、両者の間に金銭に換算できない情緒的な価値で繋がれた伝統的な絆が生まれる。

2つ目は、金銭に換算できる価値で築かれるビジネスの絆である。伝統的な絆のように支え合い、助け合う関係性を求めるのではなく、自身が支えられ、助けられる一方的な関係性を求めている。共助関係を求めている訳ではなく受け身の態度であるため、支え合う関係性をもたずに金銭を支払い、サービスで補完する。

例としてはNPOや民間の家族代行業を介し、関係性の隙間をサービスで埋めることなどが挙げられる。また、高齢者専用の見守りシステムが機能している、緊急対応のスタッフが常駐する集合住宅に入居するといった行為も、このケースに当てはまる。相手が業者であり、対価として金銭を支払いサービスという商品を買うことで支えられ、助けられるため、伝統的な絆を介する人間関係とは異なり、安心感があると考えられている。しかし金銭が尽きた時はもちろん、災害時など不測の事態には提供されるかどうか保証がないというデメリットがある。

3つ目は両者の利点を兼ね備えた、あたらしい絆である。あたらしい絆は、伝統的な絆とビジネスの絆の利点を兼ね備える絆である。

互いに支え合い、助け合う共助関係や信頼関係を求めるという目的をもちつつ、絆を築く媒介とするものをビジネスの絆寄りである物品や有償の行為、サービス、コレクティブハウスやコーポラティブハウスなどの住居での共生などとしている。

伝統的な絆とは違い、金銭に換算できない価値だけでつながれていないため、他者と関係性を築く敷居が低く比較的手軽に手に入れることができる。それは若者たちの間で広がる「シェア」する文化に表れている。例えば旅行をシェアするインターネットサービスでは自分が行きたい旅行プランを提案し、一定の人数が集まれば賛同者と共に実際に旅を行う。このように、目に見えるかたちで成果や報酬が得られたり、日ごろの生活などで絆の成果がみえたりす

るため、達成感や満足感を得ることができる（朝日新聞2012年12月14日）。

従来は地縁などの強い結びつきを介することでつながるか、その煩わしさから逃れるようにつながりを断ち切る、という両極化した考えが多くみられた。しかしあたらしい絆では絆を結ぶ相手とその質を変化させることにより、無理なくつながる関係を実現した。個人の自由を尊重し、活動をしていない場合にはゆるやかに、関係性を求め活動し強くつながる時はそれによって生じるしがらみも甘んじて受け入れる。このように臨機応変に結びつく力を変質させている。また、地縁・血縁などのこちらから選ぶことができない半強制的な関係性ではなく、趣味などの共通点を介し、自らが選択した他者につながる。この選択性という要素があたらしい絆の特徴である。

これらを踏まえ、震災以前、後の絆の質の比較を行う。震災以前の社会において人々の間で呼称されていたのは、伝統的な絆である。震災以前は無縁社会化を嘆き、問題視する意見が多くみられ、昔ながらの習慣や多世代同居を維持している家族を取り上げ、絆であると再評価していた。その根底には地縁と呼ばれる、かつてのムラ社会での互いに助け合う関係を当たり前とする、堅固な人間同士の絆に対する再評価がある。人々はかつての絆に近似した共感を介した絆を築き、失った伝統的な絆を取り戻そうとしている。また絆という言葉で表現される間柄が、家族や親子などの血縁関係のみに限定されており、それらを絆と捉えていることがわかった。

それと比べ、震災後の社会において人々の間で新しく呼称されていた絆とは、あたらしい絆である。震災後、人々が経済成長の中で失った絆を再評価し、近所付き合いなど地域住民同士の交流に代表される伝統的な絆が重視されるなど、豊かさや絆というものの在り方が見直された。そんな中、人々は現代社会の価値観に合致した関係性を求めるようになる。その中で従来の伝統的な絆に加え、臨機応変に結びつきが変質可能であり、自らつながる相手を選択することが可能なあたらしい絆も、震災以前と比べて絆として人々の中で認識された。また絆を築く間柄についても、地域で生まれる人のつながりや仲間同士の同好の関係性も絆と捉えるなどの変化がみられた。このように、絆という言葉で想起される関係性が、震災後に格段に広がりを見せた。

8. おわりに

人々は経済発展の中で個人の自由を享受してきたが、その結果地縁や血縁は薄れ、関係性の希薄な自己の利益の極大化に重きを置く社会を生んだ。人間関係は薄れ、人々の間で共助関係は失われつつある。しかし、東日本大震災の発生によって、人々は身近に頼ることのできる人がいない現状を理解した。

そんな社会の中で人々が再び取り戻そうとした絆は、2つの種類に分けることができる。1つは互いに共感し支え合い、共助関係や協働関係を築くことのできる金銭に換算できない価値を介した伝統的な絆である。そして2つ目はしがらみを嫌う現代を生きる人々に合致した、臨機応変に変質しつながりあうあたらしい絆である。あたらしい絆はその質と関係性において新しさがある。質に関しては、個人の自由とつながることによるしがらみのバランスをとっているという部分が従来とは異なる。また、絆を結ぶ対象が血縁・地縁などの半強制的な関係ではなく、自分が選択した相手だということも新しい要素である。これらを取り戻し、社会の中で支え合い助け合う人間関係を構築していくことが求められている。

人間関係を築くうえで重要になるのは、他者の立場に立って相手を思いやり、心を通わせる共感の態度である。個人の自由を尊重し多様な選択肢や価値観を受け容れるようになった社会では、人は他者を隔絶し、衝突を避けるようになっていた。それと同時に、他者への理解からも遠ざかっていたのである。これらを見直し、他者との関わり合いをもつ中で、互いの価値観を衝突させ双方に理解と共感を生みだすことが求められる。

そのためにも物質的な豊かさや経済発展を重んじ金銭に換算できる価値の追求をする比重と、人々の関係性の豊かさや信頼関係を重んじる金銭に換算できない価値の追求の比重とを釣り合わせていくことが現在の日本社会では求められている。

引用文献

- 1) 内田司：「他者と共に生きる」生き方探求の社会学—地域社会をつくる、自己をつくる—、札幌学院大学人文学会紀要、91号、pp.117-140、2012年2月。
- 2) 内田司：感情コミュニケーションの社会学と現

- 代社会, 札幌学院大学人文学会紀要, 85号, pp. 83-101, 2009年3月.
- 3) 中島正博: 地域コミュニティの再興に関する考察—日本におけるソーシャルキャピタルを巡る議論を基にして—, 広島国際研究, 15号, pp.89-101, 2009年.
 - 4) 稲葉陽二: ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ, 中央公論新社, 第1版, 2011年11月25日.
 - 5) 広井良典: コミュニティを問い直す, ちくま新書, 第1版, 2009年8月10日.
 - 6) 内山節: シリーズ地域の再生 2 共同体の基礎理論, 農山漁村文化協会, 第1版, 2010年3月25日.
 - 7) 内山節: 文明の災禍, 新潮新書, 第1版, 2011年9月20日.
 - 8) 山下智代, 平田京子, 石川孝重: 建築の社会性—「豊かさ」を軸とした価値観の変遷—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(建築社会システム), pp.101-102, 2014年9月12日.
 - 9) 香山リカ: 絆ストレス 「つながりたい」という病, 青春出版, 第1版, 2012年10月15日.
 - 10) 亀岡誠: 現代日本人の絆—「ちょっとしたつながり」の消費社会論—, 日本経済新聞出版社, 第1版, 2011年9月20日.